マルクス エンゲルス選集

MARX ENGELS

Ausgewählte Werke

5

大月書店

マルクス＝エンゲルス選集

ソ同盟共産党中央委員会付属 編
M・E・L・S 研究所
M・L 主義研究所 訳

第五冊

大月書店

マルクス＝エンゲルス選集　第5冊　　至 140.

昭和30年10月20日　第1刷発行

訳者　マルクス＝レーニン主義研究所
発行者　小林直衛
印刷者　山田博

検印いたしません

発行所　大月書店
東京都文京区本郷1の15
電話(92)3091・7887
振替 東京　16387

三陽社印刷・田中製本

目次　第五冊

住宅問題（エンゲルス）……一
第二版序文……二
住宅問題……一九
第一篇　プルードンは住宅問題をどのように解決するか……一九
第二篇　ブルジョアジーは住宅問題をどのように解決するか……五四
第三篇　プルードンと住宅問題についての補論……一〇九
権威論（エンゲルス）……一五一
『ドイツ農民戦争』序文（エンゲルス）……一五九
解説……一八五
人名注
事項注

住宅問題

フリードリヒ・エンゲルス

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

第二版序文

以下の著作は、私が一八七二年にライプツィヒの『フォルクスシュタート』[1]誌に書いた三つの論文を再刷したものである。ちょうどその当時数十億というフランスの償金〔プロシア＝フランス戦争の〕が雨とドイツにふりそそいでいた。――国債は皆済され、要塞と兵営が建設され、武器と軍需品の保有高は更新された。自由にできる資本も、それにおとらず流通貨幣量も、にわかに非常に増加した。しかも、これらすべては、ドイツが「統一国家」としてだけでなく、大工業国としても世界の舞台に登場してきたまさにその時代のことである。この数十億の金は若い大工業を力づよく躍進させた。戦後のみじかい、幻想にみちた繁栄期と、その直後の一八七三―七四年に大倒産とをひきおこしたのは、なによりもまず、この数十億の金であった。この倒産をつうじて、ドイツは世界市場で押しも押されぬ工業国である実をしめした。

あるふるい文化をもった国が、このようにマニュファクチュア〔工場制手工業〕と小経営から大工業に移行し、そのうえこれほどに有利な事情によってその移行が促進された時代は、主として「住宅難」の時代でもある。一方では、農村出身の労働者の大衆がにわかに大都市にひきいれられ、それらの大都市が工業の中心地に発展するが、他方、これら旧都市の建築配置はあ

たらしい大工業とそれにふさわしい交通の諸条件にもはや適応しなくなる。――街路は拡張され、あたらしくつけられ、鉄道がまんなかをとおされる。労働者が群をなしてなだれこむその瞬間に、労働者住宅が大量にとりこわされる。そこで、労働者や労働者を得意先にする小商人と小工業者の住宅難がにわかにおこってくる。はじめから工業中心地として発生した都市では、こうした住宅難は知られないも同然である。マンチェスター、リーズ、ブラッドフォード、バルメン＝エルバーフェルトがそれである。これに反して、ロンドン、パリ、ベルリン、ウィーンでは、この住宅難はかつては急性の形をとったし、多くはいまも慢性病のようにつづいている。

当時「住宅問題」にかんする論文で新聞紙をみたし、いろいろの社会的山師療法にきっかけをあたえたのは、ほかならぬこの急激な住宅難、ドイツでおこなわれていた産業革命のこの徴候であった。こうした論文がいくつか『フォルクスシュタート』誌にもまよいこんできた。ある匿名の筆者は、――彼はのちにヴュルテンベルグの医学博士A・ミュールベルガーであると名のったが――ドイツの労働者にこの問題を手がかりにプルードンの社会的万能薬の奇蹟的なききめをおしえる好機であるとみなした。私が編集部あてに、これらの奇妙な論文を採用したのにおどろいた、といってやると、これに答弁するようにうながされたので、私はそのとおりにした（第一篇『プルードンは住宅問題をどのように解決するか』参照）。このいくつかの論文

につづいて、その後まもなく、エミール・ザックス博士の論文をもとにして、この問題にかんする博愛主義的＝ブルジョア的見解を検討した第二の論文をだした（第二篇『ブルジョアジーは住宅問題をどのように解決するか』）。ながいあいだをおいて、ミュールベルガー博士が私の論文に答弁をくだしおかれたので、それにこたえなければならなかった（第三篇『プルードンおよび住宅問題についての補論』）。これでこの問題にかんする論争も、私の特殊研究もおわりをつげた。以上がこれら三つの連続論文の来歴で、これは別刷として小冊子の形でも出版された。いまその新版が必要になったのは、うたがいもなく、今回もまたドイツ帝国政府の厚意ある配慮のおかげであって、政府は、いつものように禁止によって販路をひどく拡大してくれた。[2] それにたいして、私はここで深甚なる謝意を表したい。

この新版については私は、本文を訂正し、二、三の補遺や注釈をつけくわえ、第一篇における経済学上の小さな誤謬を訂正しておいた。というのはわが論敵ミュールベルガー博士が遺憾ながらそれをみつけださなかったからである。

改訂してみると、過去一四年間に国際労働運動がどんなに長足の進歩をとげたかということがはっきりわかった。当時はまだ「ラテン語系の言葉をはなす労働者が二〇年来プルードンの著作以外になに一つ心の糧をもっていなかった」というのが事実であった。せいぜい、プルードンを「われわれみなの教師」notre maître à nous tous とみた無政府主義の父バクーニンに

よって、プルードン主義がいっそう一面的にされたくらいのことである。フランスでは、プルードン主義者は、労働者のあいだの一小宗派（セクト）にすぎなかったが、それでも彼らは明確に表現された綱領をもち、コンミュンでは経済の領域における指導をひきうけることのできた唯一のものであった。ベルギーでは、プルードン主義はワルーン人〔ベルギー東南部に住むラテン化したケルト民族〕労働者のあいだで問題なく支配しており、スペインやイタリアでは、ごくわずかの例外をのぞけば、労働運動では、無政府主義者でないものはすべて断然プルードン主義者であった。では、今日はどうであろう？　フランスでは、プルードンは労働者のあいだではすっかりかたづけられてしまっていて、急進的なブルジョアや小ブルジョアのあいだでわずかに支持者をもっているにすぎない。これらのものは、プルードン主義者として「社会主義者」とも自称しているが、社会主義的労働者からはきわめてはげしい反対をうけている。ベルギーではフランドル人がワルーン人を運動の指導部からおしのけ、プルードン主義をしりぞけ、運動をいちじるしくたかめた。スペインでもイタリアでも、七〇年代の無政府主義の高潮がひき、プルードン主義の残滓もそれといっしょにあらいながされてしまった。イタリアでは新党はまだ純化と形成との過程にあるが、スペインでは新マドリード連盟としてインタナショナル総評議会に忠誠をたもっていた小さな中核が発展して強大な政党となった。そして、この政党は――共和派の新聞そのものをみてもわかるように――彼らのそうぞうしい無政府主義的な先輩がな

しえたよりもずっと効果的に、労働者におよぼしていたブルジョア共和主義者の影響をとりはらった。ラテン系の労働者のあいだでは、プルードンの著作はわすれられて、『資本論』、『共産党宣言』〔本書第一冊〕その他いくたのマルクス派の著作が、それといれかわり、政治上の単独支配に到達したプロレタリアートが、社会の名においてすべての生産手段を掌握する、というマルクスの主要な要求は、今日ではラテン系諸国でも革命的労働者階級全体の要求となっているのである。

このように、プルードン主義がラテン系諸国の労働者のあいだでさえ決定的におしのけられているとしたら、そしてまたこのプルードン主義がもはや――その本来の使命にふさわしく！――フランス、スペイン、イタリア、ベルギーのブルジョア急進主義者のブルジョア的および小ブルジョア的欲望の表現となっているにすぎないとしたら、なぜいまごろそれに話をもどすのか？ なぜ、あらためてこれらの論文を再版して、死んでしまった論敵と論争するのか？

第一に、この論文はプルードンとドイツにおける彼の代表者とにたいするたんなる論争にとどまるものではないからである。マルクスと私とのあいだに成立していた分業の結果、定期刊行物で、したがってとくに敵対する見解との闘争で、われわれの見解を代表するのは私の仕事であった。それは、マルクスがその偉大な主著を完成する時間をのこしておくようにするためであった。そのため私は、われわれの考えかたをおもに論争の形で他の考えかたと対照して叙

述するようになった。この場合もそうである。第一篇と第三篇とは、この問題にたいするプルードンの見解の批判ばかりでなく、われわれ自身の見解の叙述をもふくんでいる。

しかし、第二に、プルードンはヨーロッパの労働運動の歴史上、あまりに大きな役割を演じたので、無造作にわすれさるわけにゆかない。理論上はかたづけられ、実践上はおしのけられてしまっても、彼には歴史的興味がのこっている。いくらかくわしく近代社会主義を研究するものは、運動の「克服された見地」をも知っておかなければならない。マルクスの『哲学の貧困』〔国民文庫版〕は、プルードンがその実践的な社会改良案を提起した幾年かまえに発行された〔一八四七年〕。マルクスは同書でプルードンの交換銀行の萠芽を発見し批判することしかできなかった。したがって、彼の著書はこの方面を本書によっておぎなわれる。ただ遺憾ながら、はなはだ不完全である。マルクスなら、これらすべてをずっとうまく、また適切にやってのけたことであろう。

最後に、しかし、ブルジョア社会主義と小ブルジョア社会主義には、ドイツでは今日にいたってもなお有力な代表者がある。しかもそれは、一方では、講壇社会主義者[8]とあらゆる種類の博愛主義者によって代表されている。そして、彼らのあいだでは労働者をその住宅の所有者にかえたいという願望は、あいかわらず大きな役割を演じており、だから、そういう人々にたいしては私の著作はあいかわらず適切である。だが、また他方では、社会民主党自身のうちに、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

帝国議会内の議員団のなかにまで、一種の小ブルジョア社会主義がその代表者をもっている。しかも、近代社会主義の根本的見解や、いっさいの生産手段を社会的所有にかえよという要求を正当だとみとめはするが、その実現は、じっさいに見きわめのつかない遠い将来にはじめて可能なことだと公言する、といったぐあいである。こういうわけだから、人々は現在のところは、たんなる社会的なつぎはぎ細工にたよるほかなく、事情しだいで、いわゆる「労働者階級の向上」をはかるというもっとも反動的な努力にさえ共鳴することもあるのである。こうした傾向のあることは、格別に素町人階級の国であるドイツでは、そして工業の発展がこのふるく根をはった素町人階級の根を強制的にまた大規模にぬこうとしている時代には、まったくさけられない。このことはまた、社会主義者取締法、警察、裁判官にたいする闘争のあの八年間にあのようにすばらしく証明されたおどろくばかりの良識をわが労働者がもっている以上、運動にとってもまったく危険がない。しかし、こういう傾向のあることをはっきり知っておくことは必要である。もしこの傾向がのちになってもっとはっきりした形態をとり、一定の輪郭をそなえるようになれば――それは必然的であり、またのぞましいことでさえある――彼らはその綱領を作製するために彼らの先輩のところにもどるにちがいない。そうすると、プルードンを無視することはできそうにもない。

「住宅問題」の大ブルジョア的および小ブルジョア的解決の核心は、労働者にその住宅を所

有させることである。しかしこれは、この二〇年間のドイツの工業的発展によってまったく独特の仕方で解明された一点である。自分の住宅ばかりでなく、なお菜園や畑の所有者でもある賃金労働者が、こんなに多くいる国はほかにはどこにもない。ドイツには、それとならんでほかになお家屋や菜園または畑を賃借人として事実上かなり確実に保有している多数の賃金労働者がいる。園芸または小規模の農耕経営と結合していとなまれる農村家内工業は、ドイツの若い大工業の広範な基礎になっている、――西部では労働者は主としてその住宅の所有者であり、東部では主として賃借人である。家内工業と園芸または畑の耕作との、したがってまた確保された住宅との、このような結合は、手織業がまだ力織機とたたかっている地方、すなわちライン下流地方やウェストファーレン、ザクセン、エルツ山地地方やシレジアのいたるところでみられるばかりでなく、なんらかの種類の家内工業が農村の営業としてはいりこんでいる地方、たとえばテューリンゲンの森林地方やレーン山地のいたるところでみられる。タバコ専売問題の議会討論のさいに、葉巻製造がもうどんなにひろく農村の家内仕事としていとなまれているかがあきらかになった。そして、数年前にアイフェル地方でおこったように小農民のあいだでなんらかの困窮状態があらわれると、ブルジョア新聞はその唯一の救済策としてさっそく適当な家内工業をはじめよとさけびたてる。事実、つよまりつつあるドイツの零細農民の窮状も、ドイツの工業の一般的状態も、農村家内工業をますます拡張することをうながしている。これ

はドイツ特有の現象である。フランスでもこれとやや似たものがみられるが、それは、たとえば養蚕地方といったようなごくまれな例外にすぎない。小農民というものがいないイギリスでは、農村家内工業は農業日雇人の妻や子供の労働にもとづいている。アイルランドでだけ、ドイツのようにできあい服裁縫の家内工業がじっさいに農家によっていとなまれているのがみられる。ロシアその他、工業的世界市場に代表されていない諸国のことは、ここではもちろん論じない。

こうして、今日、ドイツの広大な領域にわたって、一見したところ機械の導入以前に一般に支配的であった状態に似た工業状態が存在している。しかし、一見したところそうみえるだけである。以前の時代の農村における、園芸や畑の耕作と結合した家内工業は、すくなくとも工業的に進歩しつつある国々では、労働者階級として物質的になんとかやってゆける、そしてところによっては快適な状態の基礎であり、それとともに彼らが精神的・政治的に無であることの基礎でもあった。手労働の生産物とその費用とが市場価格を決定した。そして労働の生産性が今日にくらべるととるにたりないほど低かったので、販売市場は通例供給よりも急速に拡大した。このことは、前世紀〔一八世紀〕のなかごろにはイギリスと部分的にはフランスについても、そしてことに繊維工業について、あてはまることである。そのころやっと三〇年戦争[4]の荒廃からたちなおり、このうえなく不利な事情のもとでふたたび上むきにすすもうとしていた

ドイツでは、いうまでもないことであるが、事情はこれとはまったくちがっていた。ここで世界市場をめあてとしてはたらいていた唯一の家内工業である麻織物業は、租税や封建的負担によって圧迫されたので、機業農民をほかの農民のはなはだ低い水準以上にたかめることはできなかった。とはいうものの、その当時農村の工業労働者はある程度の生活の安定を得ていたのである。

機械の導入とともにこうしたことがみな変化した。価格はいまでは機械の生産物によって規定されるようになり、家内工業の労働者の賃金もこの価格とともに低下した。しかし、労働者はその賃金をうけいれるか、それとも他の仕事をさがすかしなければならない。そして彼は、プロレタリアとなるのでなければ、すなわちその小家屋、小菜園、小畑地――自分のものであろうと賃借したものであろうと――を放棄するのでなければ、それをさがすことができない。しかもよくよくのことでなければ彼はこれを放棄しようとしたがらなかった。こうして旧来の農村の手織工の園芸や畑の耕作が原因となって、そのために力織機にたいする手織機の闘争がどこでも大いにながびき、ドイツではまだこの戦いはおわっていない。この闘争において、とりわけイギリスでは、以前には労働者のかなりの福祉の原因になっていたおなじ事情――すなわち労働者が彼の生産手段を所有していること――が、いまでは彼らにとって障害となり、不幸となったことがはじめてあきらかになった。工業では力織機が彼らの手織機をうちやぶり、

農業では大規模農業が彼らの小経営を敗退させた。しかし、この二つの生産領域のどちらでも多くの人の協業と機械および科学の応用とが社会的通則となったのに、彼の小家屋、小菜園、小畑地や彼の織機が彼を個人的生産と手労働という時代おくれの方法につなぎとめていた。いまでは家屋や菜園の所有は、完全な移動の自由よりずっと価値の低いものになってしまった。どんな工業労働者でも、ゆっくりとではあるが、餓死するにきまっている農村の手織工の身になりたがるものは一人もないだろう。

ドイツはおくれて世界市場にあらわれた。わが国の大工業は、四〇年代にはじまり、一八四八年の革命によってその最初の高揚をとげ、一八六六年と一八七〇年の革命[5]が大工業のすくなくとも最悪の政治的障害をとりのぞいてから、はじめて十分に発展することができたのであった。だがそのときは、世界市場の大部分が占拠されていた。大量生産品はイギリスが供給し、風雅な奢侈品はフランスが供給していた。ドイツは、価格の点では前者を、品質の点では後者をまかすことができなかった。こうして、さしあたっては、ドイツの生産がこれまでたどってきた道にしたがって、イギリス人にとってはあまりにこまごました品物、フランス人にとってはあまりに粗悪な品物をもって世界市場にわりこむほかにはすることがなかった。しかし、まずりっぱな見本をおくっておいてあとから粗悪な商品をおくるというドイツ人愛用の山師的なやりくちは、むろんまもなく世界市場で手ひどい罰をうけ、かなりすたれてきた。他方、過剰

生産の競争は徐々に堅実なイギリス人をさえ、質をおとすという急な下り坂に追いやり、こうして、この道にかけてはおよぶもののないドイツ人をたすけた。こうして、わが国もついに、大工業をもち、世界市場において一役を演じるまでになった。しかし、わが国の大工業はほとんどもっぱら国内市場向にはたらいている（国内の需要をはるかにこえて生産している鉄工業はべつとして）。そして、わが国の大量輸出を構成するものは無数の雑貨で、この雑貨にたいしては大工業はせいぜい必要な半製品を供給するだけであり、この半製品そのものは大部分農村の家内工業によって供給されている。

そしてここに、近代労働者が自分で家屋や土地を所有していることの「祝福」がみごとにあらわれている。ドイツの家内工業のようにはずかしいほど安い賃金をもらっているところは、アイルランドの家内工業までふくめても、どこにもない。競争があるために、資本家は、労働者の家族が彼らの小菜園や小畑地でもうけただけを、労働力の価格から控除することができる。労働者はどんな出来高賃金でもうけいれなければならない。そうしなければ彼らはなに一つうけとることができず、彼らの農耕の生産物だけでは生きてゆけないからであり、他方ではほかならぬこの農耕と土地所有こそが、彼らをその土地にしばりつけ、彼らがべつの職業をさがすのをさまたげているからである。そして、世界市場で多くの雑貨についてドイツに競争力をもたせている理由はここにあるのである。資本利潤全部は正常な賃金からの控除によって、ひきだ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton